

2021年度GTセミナー 第55回保育環境セミナー 人的環境編 前編②

第241号 2021年10月11日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

人的環境編 前編②

2021年9月25日に「第55回保育環境セミナー」
(人的環境編 前編)を新宿せいが子ども園にて開催しました。

全国から100施設を超えるお申し込みを頂きました。
前回までは「空間的環境」「物的環境」についてお送りしてしまし
たが、今回は第3編目「人的環境」についての前編①です。

「人的環境」について藤森代表から考え方をお示し頂きました。

【セミナー開催趣旨】

乳幼児教育は、その時期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることが基本です。たとえば、赤ちゃんにハイハイをさせようと思ったら、その手順を教えるのではなく、自分から移動したいという動機(欲しい「もの」が前方にあるとか、抱かれない「ひと」が少し先にいるとか)を持たせ、そこまで行くための距離「くうかん」が必要になってくるのです。そこには、もの、ひと、場(空間)が関わってくるのです。そのために保育者は、乳幼児の主体的な活動を促し、乳幼児期にふさわしい生活が展開されるように、子どもが自発的、意欲的に関われるように、物的・空間的環境を構成しなければなりません。

そこで子どもは、それまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得し、心身を発達させていくのです。今年環境セミナーでは、「くうかん」「もの」「ひと」という環境について具体例を通して基本から学んでいきます。

ギビングツリー代表 藤森平司(新宿せいが子ども園 園長)



—チーム保育—

チーム保育の考え方が私の考え方の中の一つの特徴です。例えば、今後の課題ではあるのですが、2019年保育学用語辞典という秋田先生の本が出版されました。この中にチーム保育という言葉があります。辞書には、熟練保育者が初任期の保育者とともに、複数でチームを形成して保育に当たる体制と書かれています。2001年に幼稚園がそうですが、文科省が幼児教育の政策の一つとして示した。園には熟練した経験者と、新人とチームを組んで下さいと提案をした。2016年には、職員勤務年数15年以上において必要な保育士を配置し、キャリアを積んだ保育士が若手保育士とともにチームで行う体制を構築した場合には、保育士一人分の人件費を加算するという、チーム保育推進加算が作られたことがあります。15年以上のキャリアと、若い人がチームを組むとチーム保育加算をつけるとあって、辞書にはそう説明があります。そのあとに特別に、「藤森はチーム保育について、役割分担をしてともに保育することと定義し、メリットとして子ども理解を複数の視点で行えることを第一に挙げている。」私が提案しているのは、熟練と若い目ではなく、複数の目で子どもを支えることを提案している。そういうことに対して、チーム保育の基盤として組織文化が存在し、組織の在り方が保育の質に強い影響をしている。組織の一員としての成長を目指した園内研修の試みが行われている。チーム保育の考え方は、複数で組んでいることが一般化してきた。たまたま今年の春に、遠藤先生が「チーム育児」と書いている。乳幼児期の社会情動的発達を支える「チーム育児」と言っています。その文章を読むと、「社会情動的発達は、幼児期の終わりまでに育て欲しい10の姿と同様に、社会の中でよりよい人生を歩んでいくうえで必要な力。人生を通じて学び続ける。この土台を支えるのがアタッチメント。このアタッチメントとが、子どもの社会情動的発達を支えるうえで、またチーム育児における保育者の在り方を考えるうえで重要です。」アタッチメントというとこれまで、担当制のように一人という言い方をしていたのが、逆にアタッチメントは、「チーム育児」における保育者の在り方が重要だといういい方をしています。複数で支えることが安心基地として大事だという言い方に代わってきた。アタッチメントを理解するときに注意したいのは、アタッチメントは、スキンシップとは別物ということです。アタッチメントは、子どもが不安や恐怖、マイナスの感情を抱いたときに、保護者や保育者など信頼できる人との関係を通して安心感を得ること。安心感を得た子は、一人で冒険や探索を楽しむようになります。大人は失敗を先回りして防いだり、後追いをしたりせず、子どもが元気よく、飛び出せるように見守ります。アタッチメントは、見守ることであるという言い方に代わってきました。見守る人が、チームで見守ることが必要です。大人は基地として、子どもを離れたところから見守ることで、子どもは自発的な遊びに没頭し、一人でいられる力を身につけていきます。「助けて」と言えば、助けてもらえるという、いつも見守られている他者への信頼感は、社会情動的発達の社会性に関わる力の土台になります。遠藤先生が「チーム保育」とあえて言わないのは、家庭ともチームを組むべきということです。逆に、家庭だけでいいということではないことを表しています。園の先生方へこんな助言をしています。「園の先生方が『チーム育児』という視点を持つことで、保護者にかかる言葉かけが変わってくるはず。チームでやっていることが、見守る姿勢に変わってくる」と言います。先生方の子どもたちへ援助も、集団生活を通じた社会性に関わる力の視点に立てば、今後もいろいろな工夫が出来るでしょう。子育てはみんなで力を併せて行うものという、信念をもって子どもと接することで、子どもたちの面倒を通して、男だから、女だからと古い価値観にとらわれない自由な生き方を学ぶはず。園の先生方が「チーム育児」の視点

を持って、保護者・子どもたちに接することは、新しい社会の未来を切り開くことだと思います」と書いてあります。熟練と若い人ではなくなってきました。いわゆる社会ネットワーク理論。アタッチメントの考え方も、少しずつ変わってきています。これが辞典にもあるように、私が提案していることです。

Emotional Intelligence Quotient「感情知能指数」

子どもたちは、社会ネットワークの中で見守られる必要があります。そのために職員はチームによって保育していきます。チームは、一つの社会ですので、社会の中で生きていく知恵が発揮されます。その社会の中では、お互いに心の交換の有無によって善し悪しが決まります。そのために心の知能指数であるEQ力が求められてきます。

いいチームの指標の判断は企業が行っています。今の仕事はチーム力と言われています。そのポイントがいくつかあります。

—ポイント1 共鳴—

メンバーがあうんの呼吸で動き、その動きが全体で美しい音色を響かせるように、お互いの音を聞きながら、美しい和音を奏でます。そして、その音が反響しあい、増幅します。

—不協和音—

共鳴に反し、不協和音の音色は、何となくぎくしゃくし、居心地が悪い気がしてきます。そして、集団は精神的苦痛で頭がいっぱいになり、リーダーが発するメッセージや自分たちのミッションに注意が向かなくなります。

今度運動会があります。みんな一世に準備をやる、時間外で残ってやることはないですね。手が空いている人がやっておくねとやる。これが本当のチームワークということです。

—共鳴するために—

「職員がお互いに信じあうこと」「明確な保育理念を園長が示すこと」いくら考え方がそれぞれ違っていても、決して子どもを悪くしようという気持ちから保育しているわけではないのです。その人が、自分の経験から考える「子どもにとって」良いと思って保育をしようとしていることを信じることです。その気持ちにまず共感してあげて、その気持ちを実現していくための方法を、理念に戻ってもう一度一緒に考えることです。まずは、それぞれの思いの共鳴を起こすことです。

この間、ある公立に第三者評価の話聞いたときに、そこの自治体は、明確な理念がなく園長に任せていることだった。それなので、「明確な理念を園が作らないと、評価は出来ない」といったらしい。それに向かって、どれだけ職員が動いているか、保護者に伝えているかを評価していくわけなので、評価する前に言ったのが、理念を作りなさいと助言したと言っていた」と言いますが。私もそう思います。しかも、それは昔ながら認知的なことを教えたり、訓練するような理念は変えないといけません。それを持つことで、お互いの職員が動く。職員で考えが違う人がいます。それは経験が違うから決して悪気からしようとしているわけではなく、違う考え方をしています。それは、悪いことをしようとしているわけではないと信じることです。それをこういう方法があると、修正していけるのは理念があるから、そうするとまとまってくると思います。

—バロメーター—

共鳴しているかどうかのバロメーターは、笑い声。不協和音のバロメーターは、怒りや不安や不機嫌な沈黙。

もう一度理念を見直して、子どもたちに何が大事か振り返る必要があります。

—ポイント 2 楽しさ—

子どもの発達、職員の楽しさに関係していることが推測されます。それは、職員の楽しさが、子どもたちに伝わり、子どもたちは生活、遊びにおいて楽しさを感じ、そこからの影響を受けやすくなり、環境との相互作用により発達する特性において、より効果的に作用しあうようになるからです。

—ポイント 3 共感—

様々な特性を持った同僚に対して、そのモチベーション、発想、動機付けの要因に、自分と違った経歴を持っていようが、それに左右されずに共感する能力が必要です。そうでないと、素晴らしい発想を見逃してしまうことがあるからです。そうでないと、素晴らしい発想を見逃してしまうことがあるからです。チームの多様性を保証するためにも、相手の立場になって共感力が必要になってきます。

—ポイント 4 思いやり—

「思いやり」は情緒的に聞こえますが、共感した結果、生まれてくるものです。それは、あくまでも相手の立場になって理解しようとする心です。自分を分かってくれる、自分のことを考えてくれるという確信が、チームワークを強くするのです。そのための寛容さ、受容力が必要になってくるのです。「相手の言葉に熱心に耳を傾け、その胸の内を想像しましょう。」「他人の気分を押し量ろうと努力しましょう。」

—ポイント 5 組織理解—

組織には、それなりの文化があります。人との関係には、ある文化が流れています。それを壊すのではなく、それを大切に、それを生かす方法を考えます。結果には、原因があるのです。原因を考えずに、結果だけを論じても意味がありません。

—ポイント 6 影響力—

組織という一つの社会の中での力は、お互いの影響をし合う力は、個人の力に勝るとも劣ることはありません。そして、それは、お互いに影響し合うことによって、足して2になることから、それ以上の成果が表れるのです。

—ポイント 7 チームワーク—

「チームメンバー全員に、意見や提案を求めましょう」

「チームメンバー全員を認め合い、後押しし、協力をしましょう」

人という環境の中に保育者はどうあるかという関係です。その中のチーム保育の考え方が基本的にオリジナルな提案。次のオリジナルな考え方が子ども同士の関わりです。

—子ども同士の関わり—

集団社会化理論 ジュディス・リッチ・ハリス

親の育児による子どもの発達への影響は、従来考えられていたほど大きくはない。むしろ、家庭外における仲間や友人との集団関係の中における経験の影響が、子ども一人ひとりの個性や能力の発達により重要な意味を持っている。

—脳の敏感期における環境—

脳の敏感期における環境として、子ども同士の関わり、子ども集団からの刺激が重要です。その時期における子ども集団としての環境は、まずきょうだいの中での経験です。それは、異年齢の環境でした。それが次第に他の子との集団を形成していきます。

①たてわりではない異年齢児保育

私が提案する「異年齢児保育」という形です。まだまだ私が思っている「異年齢児保育」が認知されていません。辞書にも、藤森が考える「異年齢児保育残念」とは載っていないので、周知されていないが、異年齢は難しいなと思いました。来年、ある保育雑誌に「異年齢」について、1年のうちの2回「異年齢」を書くようになっていっている。びっくりしたことがあって、「異年齢」の実践として他の園記事として、幼稚園の預かり保育の異年齢児保育。幼稚園は普通の時間は年齢別でやって、預かり保育の午後は少なくなるので、異年齢をやるのでそのことが書いてあった。そのカリキュラムを聞いて、カルチャーショックでした。その中に、普段使わないブロックや、ごっこ遊びを入れると書いてありました。幼稚園の保育の中では、ブロックやごっこ遊びはせず、先生が教えることをするので、預かり保育でしかないそうです。普段接しない子なので、異年齢を邪魔しないようになるべく空間をあけるとか、なるべく「異年齢」をさせないようにしていることがまだまだある。2つ目の園は、早朝保育による異年齢。異年齢ではなく、混合保育なのにと考えた。預かり保育と早朝保育が2月分。もう一つは小規模園で、年齢別保育が組めないくらい人数が少ない園の異年齢保育。ということ考えた時に、まだまだ「異年齢児保育」は一般化していないのだなと思った中に、もう一つ一つはこういう前提があります。最近、コロナによってではないが、考えたことがあります。いろいろなことが言われているのが、差別についてです。この間、パラリンピックがありましたけど、障がいの差別は今はそれほどなくなりました。障がいによっても様々差があるわけですが、パラリンピックをこれまでちゃんと観たことがなかったですが、パラリンピックは、障がいのある人のスポーツだと思っていましたが、その中でも細かく分かれています。せいがの森で体験したことだが、文字のLDの職員がいました。彼は文字だけが苦手。その彼が、毎年スポーツ大会に都の代表として、全国大会に出るときに、障がい者大会の中で勝つに決まっているだろうと思った。彼は疾病障がいなどもあるが、文字のLDだったら普通の大会出たらいいのにと考えたくらいだが、手帳を持っていますと言ったが、違うでしょと思ったが、障がいと言っても様々あるが、障がい者・障がい児というべきではない。どこが特別な支援が必要かということです。学校へ行っても、数学が苦手だったら特別に支援しないとイケないとか、概念が変わってきています。それがインクルージョンという考え方で、それぞれ支援する場所が違うことが一つあります。話題になっているのが男女差別。私の高校は都立で、男子校が途中共学になりました。しかし、クラスは40人中30人が男子、女子が10人。それが今回撤廃され、男子枠女子枠を作ってはいけません。だったらいい学校は、みんな女子になっちゃうなと思います。そう区別しなくなったら、男性だけ点数を上げて問題になったこともあった。男女も、服装も、制服もわからないようにしようとか、違っているとかならずではなく、差別をするのをやめようというのが大きい。障がい者への差別をなくそう。次に来るのは、年齢による差別はやめようと思えます。世界で起きています。5歳だからとか、先輩だからとか、そうではなく、あなたは何か出来るかの動きが来るように思えます。それが一つ提案しているのが「異年齢児保育。」異年齢というわけではなく、年齢で子どもを判断しないで、その子が何か出来るかを見ようという意味です。言葉が難しいです。子どもを年齢で判断しない。3歳だから、これをしなさいではなく、発達は連続で、順序で追ってくるんですよ。5歳だからと、突然難しいことをやっても無理ですよ。私が提案する「異年齢児保育」のメインです。これはなかなか誰も言わないことです。どうしても年齢別でや

っています。これは、コロナ収束後に大きく変えていけないことだろうと思っています。例えば、小学校へ行くと、年齢別になっていますね。それをモデルにして、就学前の年齢別になっていますね。これが世界の中では、非常に遅れています。小学校は学年別になっています。学年ごとにやることは、どこの国もあります。1年生はこの内容、どこも決まっています。学年別ですし、やることも決まっています。しかし、やることが決まっているのは、1年生はこれを教える内容ということで、6歳は1年生ということではありません。この内容を教える子たちが1年生ということ。2年生はこの内容を教える人。1年生のことをきちんと分かった子が、2年生になっています。年齢は様々です。揃えるのは、2年生で教えるべき内容を教わる子がいます。これは、ドイツへ行ってびっくりしたのが、2年生の授業参観をしました。クラスを見ると大きい子が多くて、通訳の人に「4年生くらいに見え、2年生ですか?」と聞くと、「2年生です」と言う。質問を変えて、「ここにいるのは、何歳の子たちですか?」と聞いたら、「6,7,8,9歳がいます」といった。1年生のことが出来た子が2年生にいて、できない子はもう一度、1年生をやっているらしい。それをステイと言います。もう一度びっくりしたのが、2年生にそんなにいるのだと思った。「2年生の時点で落第ではないけど、どういう観点で決めるのですか?」と聞いた。「どんなテストで、どう決めるのですか?」「1年生で試験をしているのですか?」と聞いたら、「100パーセント親の希望です」と言っていました。もう一度、1年生をさせてほしい。どんどん上に行ってしまうとわからなくなる。それよりも確実にやっていった方が、社会に出た時にいい。日本はなぜ落第しない、ステイをしないかという、大学の先生は反対します。「子どもがかわいそう、他の子がいじめられるからかわいそう」と言います。これは向こうは逆ですね。出来もしないのに、そのクラスにいる方がいじめられますね。その子にあっていない方が、子どもも気持ちいいし、教える側も教えやすいし、いわゆる落ちもこぼれない。と考えた時に、外国の学年別は年齢別とイコールではないと言った時に、幼児教育はどうか。幼児教育は発達です。小学校は1年生はこのことを教える。2年生はこのことを教える。というように、この発達を遂げる。それがクリアしたら、次の発達をさせることが決まっていて、卒園するまでにこの発達にすることだけが決まっている。だったら3,4,5歳で決めてしまうのかと思ってしまう。この発達をしている子たちは、この発達にあったことをさせないといけない。そうしないと、次の発達に行かないですよ。そしたら、その発達は3歳がいるかもしれない、4歳がいるかもしれない、5歳がいるかもしれない。異年齢になる可能性があるという意味の「異年齢児保育」は、日本はどこも多分ないですね。「異年齢児保育」というと、思いやりを育てるとか、面倒を見るとかは広がってきている。そうじゃなくて、その子の発達を遂げて学校へ送り出したい。そのためには、年齢による差別をするのではなくて、その子は今何が出来るのか、その子にあったことをさせる。私が考えている「異年齢児保育」と対に必要なのは、一人ずつの発達チェックをしていく。それが『ミマモリング』というシステム。パソコンでお便りが作れることが問題なのではない。その子の発達をきちんと遂げさせるために、現在の発達を先生がまず理解して、発達にあった次のことをやるのは、個人的に違うんです。ですから、やる内容はある。はさみなら、直線切りをさせることはある。だったら、直線切りをしている子にするべきで、3歳にするのはおかしい。という意味の「異年齢」は、まだまだGTの中でも、なかなか理解していないと私は思います。私の園ではもう一度、「異年齢」をテーマにしよう、こういう意味の「異年齢」であることを、普及させようと思っています。そうしないと、きちんとした発達をしていない子を、学校に送り出してしまうということが起きます。私たちは発達をチェックして、卒園するまでに発達をさせるけど、まだしていない子の場合、この部分は達していません。というのを小学校へ送っている。それがうちの園からすると、要録なんです。要録は、卒園までにクリアするはずが、この子は、この分は行っていません。学校へ行って、気を付けてください、と資料を渡すのが要録の一つの資料で、小学校への円滑に接続する、本来の幼小連携だと思っています。それがまだ日本はノーマルではないです。全員が年長児を過

したら全員が1年生です。1年生遅らせたら普通になるのに、行かせてしまうので、障がいになってしまうんです。スピードが個人で違いますからね、追いついてくる子もいるんですよ。ドイツは、小学校へ入る年齢も親が決められるそうです。早くは入れられないそうですが、6歳になるといける権利がある。1年生の段階から異年齢なんです。という考え方の幼児教育なんです。その意識を持ってほしいと思っています。一人の発達を理解して、発達に合ったことをさせていく。0歳児クラスは寝返りが出来ない子もいれば、歩き回り走り回っている子もいる中で、同じ保育をしているかですよ。この時は目に見えて差がありますが、5歳児でも4月生まれと3月生まれで個人差が同じことをさせてしまっている。出来ないのに1年間やれば次の学年に行ってしまう。これが履修主義と習得主義です。

課題による集団—①履修主義から習得主義へ—

履修主義（日本の学校）：同年齢の子を一斉に入学させ、学習内容が定着していなくても決まった時期に卒業させる日本の義務教育。「一律・平等」のもと、教育水準の底上げに効果。

この問題のひずみが、大学なんです。早稲田大学の総長が投稿をしていました。日本の大学は、高校受験のまま。大学時代は、お互いがチームワークを組んだりすることを学ぶので、バイトやクラブ活動にあけくれている。そのあとは、会社に入って仕込めばいいだろう。会社もそれでいいと思っている。大学生は、大学時代は友達とサークルで海外旅行へ行ったりしている。知らないうちに、10数年前は、日本は世界の中で競争力が1位でした。それが去年調査したら、世界で34位でした。今大学で学ばないと置いて行かれてしまう。大学の4年間学ばないで、遊んで過ごせば卒業できてしまう。それが世の中に出て遅れてしまった。総長が言うには、日本の大学を入試するには、高校時代から理系文系を分けて、文系は理系をしない。そのまま世の中に出てしまう。理系は歴史や地理をやらないんです。それが競争力として置いて行かれているから、と早稲田の政経学部で数年前から数1と数Aを入れたそうです。理系でも、歴史や地理がないとダメというようなことが見直され始めている。4年過ごせば卒業できるではない。何を学んだかが世の中に出て大事というようなことが起きているのは、学校は履修主義。

習得主義：目標の達成度に応じて進級を決める。一人一人に応じた学びを実現する土台となる。義務教育は終了段階で一定の能力を身につけることに意義がある。文科省は、現在、習得主義制度への模索を始めている。では、乳幼児教育は？「小学校就学時の具体的な姿」が示され、各年齢ごとの発達過程は目安となる習得主義である。

私たちは習得主義に変え、発達をさせ、新しい指針の発達過程をなくして卒業までの10の姿になっているんです。それなのに相変わらず年齢別が強い。「異年齢」の中にはもちろん、思いやりが育つとか、教える教わるなど意味があります。生活の中でも意味があります。いわゆる設定保育でも、発達を遂げるためには、年齢で分けをすることはおかしいと早く気付いてほしい。なんで文科省はこだわるか。それは小学校がそうだからというが、変えないといけない。「異年齢」の独特の考え方がある。エデュケーション2030の中に、小学校以降の教育の中に、19世紀の教室の写真が載っていました。20世紀の教室になるとモダンになりますが、あまり変わらない。これが21世紀の教室は一斉に教えるのではなくて、子ども同士のグループ学習。個々に教えていく。私が提案している保育室です。同じ年齢に、一斉のカリキュラムではなく、個々にケアをしていく。こういうことが、世界ではどんどん進んできています。日本の教育は遅れていると思います。当然、空間、物、人という環境に影響してきます。この中で、もう一つ支えるカリキュラムが参画の概念があります。子どもたちの参画。参加は、大人が決めたことに子どもが加わることですが、参画は決めること自体に子どもが関わること。これを実現しているのが、提案している一つの選択です。子どもに選択させる。選択する保育を私の保育の特徴だと思っています。1つのことをやらせるのではなく、どちらにする？と選択をさせていく。本当だったら、演奏もここへ行きましょうではなく、いくつか提案をして、子どもに

選ばせるとか、子どもたちに選ぶ能力や、規範的精神もないといけない。1歳のクラスが2歳のクラスになって、ゾーンという考え方に変わってきます。1歳児は漠然と遊んでいます。そろそろ移行させていこうと、1歳の先生がこの辺にブロックを置いて、ままごとを置いて、本を置いて、どこをやりたいかを意図したそうです。おやつを食べたらそこへ行って、どこで遊ぶ？と聞いたそうです。そしたらある子が、ブロックはここだよと言ったら、ブロックはあっちの方がいいよと助言したそうです。先生がここの方がいいよと説得したそうですが、その子は「うん、分かった。でも、ままごとはあっちの方がいいよ」と言ったそうです。こういう力が新しい価値を生み出すと言われていきます。批判的精神（クリティカルシンキング）。日本はこれを割と嫌うんです。先生の言うことに逆らっているように思うんでしょうね。新しい価値を生み出すには、子どもの提案は非常に大事なんです。必ずしも飲むことではなく、話し合うことです。これからの時代は参画をしていく、そのために選択していくことも、私のオリジナルです。「チーム保育」の考え方、「異年齢」の考え方、「参画の考え方」を見ても、これは見守る保育かという、そうではない。藤森メソッドという言い方をしています。きっと時代的にそうなる。1つは科学的に証明されてきていること、海外がそうやって子どもたちの学力を上げています。日本は今、小学校まで学力が高いので政府は安心しているんです。ヘッグマンも同じです。小学校の今の学校形式の学年別は、認知的なことは効果的なんです。調査は5年生と中学生でやっているの、まあまあ学力が高いんですよ。短期的にはやれば成績がいいですが、でも、大学生以上世の中に出てどうか。日本はどんどん下がっている。競争力もOECDで最下位です。今の学校教育幼児教育を含めたこの時期の教育が、長期的に下げているのだと早く気付いてほしいです。私たちのGT園から発信していきたいと思っています。3つの環境を通して見直すことを今年はテーマにしてやってきました。「異年齢」の中にも、生活の中のメリットもあるし、良さもあるがそうではなく、課題保育と言って、先生がカリキュラムを組んでやるようなときの異年齢のやり方こそが大事です。よくあるのが、そこだけ年齢別にして、生活は異年齢をすところもあるが、そこだけのところこそ、年齢で分けるべきではない。その子の発達に分けるべき。その子の課題で分けるべき。特別に人という考え方を強調して話をしました。先生の在り方、後半、子ども同士の異年齢の在り方、子どもも参画するという選択の在り方を違う観点で、もう一度見直してほしいと思います。今年は3回シリーズで続けて参加した方もいると思いますが、環境をどう作っていくか、どう発達を保証していくことは今後も課題と思いますので、この後も来年どんな企画になるかわかりませんが、新しい保育の提案をしていきたいと思っています。ありがとうございました。

本稿は、2021年9月25日に開催した「第55回保育環境セミナー」の基調講演の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)